

## ■審査委員長 小林博人先生 インタビュー記事

第2回ウッドトランスフォームシステムコンペティションの審査委員長を務める小林博人先生にお話を伺いました。小林先生は建築家として世界中の被災地で被災者や学生とともにベニアハウスを建てて災害支援をしています。第一回のコンペティションでも審査員を務めウッドトランスフォームシステムに大きな可能性を感じて頂いております。災害支援や建築のことだけではなく木がもつ可能性などについてもお話を伺いました。

### 【現代の災害とその対策について】

災害といえば地震、津波といった自然災害が中心で、その対策を考えていましたが、豪雨のような災害でも人が亡くなるということが、日常的に起こるようになりました。災害の種類が増え、それがいつ自分の身に降りかかってくるかが読めなくなっているため、リスクが増大してきているように思います。さらに、世界に目を向ければ社会的・人為的なことによる災害というものも発生しています。昔から戦争はありますが、そのために何百万という人々が短期間に移住をするということはありませんでした。この秋からトルコ人の学生が私の大学へ入学しますが、聞くと400万人の移民がトルコに流入しているそうです。この数は、国の人口を変えてしまうぐらいの数ですので、それによってトルコの人々の日常生活が変わっていく可能性があります。トルコの人々も協力はしたいけれども、いざ自分たちの生活に降りかかってくる様々な問題を考えると、やはり受け入れがたいという気持ちが出てくるようです。このような、必ずしも自然災害だけではない人的な災害が起きている時代に、それらにどう備えるかということが問われるようになってきたと思います。ここで考えるべきは、いざ起きたらどうするかということはもちろん重要ですが、その「いざ起きる」ということを予測できないので、「日常生活を基本とした上で、非常時にはこう対応する」という考え方を持つ必要があります。その意味で、日常的に使っている物を非常時にどう変えるかという発想が求められる時代なのではないかと思います。何か起きてから考えたり作るのでは遅いので、日常的に我々がこうしたことを考えながらデザインをすることが重要です。日常的にどう構えるかというメンタリティを広めていく上で、このコンペティションは意味があると思います。

### 【木材について】

私のプロジェクトで実感した木の良さは、軽くて扱いやすく、そしてその場で加工しやすいことです。工業化され、それが計算されて作られていく仕組みの中であればコンクリートや鉄は有効に活用できますが、予測できないような事態において現場で対応しなければならないというときには、材料として加工しやすい木は大変重宝します。ほかに、自然の中で成長し循環できることも重要な利点です。適切に育てていけば、必要な分を必要ところで使い、次に育てたものをまた使っていくことができるというサステナブルな仕組みができます。木の寿命は人間のスパンと比較すると長いですが、それも歴史の中で先代、先々代の方々が育てた木が今使えるようになっているので、それをしっかり繰り返していくことが大事だと思います。そういう意味において、木は非常に人間に近い材料ということが言えると思います。色々な木に触れるとき、改めて香りや手触りも見え方も異なっていて、色々な表情を持っていることがわかり、そのことも木材がもっている他の素材にはない魅力です。その魅力を多くの方に感じ取って

ただきたいと思っています。

#### 【建築と人々の関係について】

日本では、建築はプロにしてもらうものだという概念が固定化してしまっていますが、元々そんなことはありませんでした。自分たちのコミュニティの中で助け合いながら作るというのが自然であったし、その土地の気候に合ったものを自分たちで作ってきたわけです。しかし現在は工業化されて、プロが工場で作って持ってきて組み立てるということになり、建築は工業として非常に発達しました。一方で、日本人と建築との距離はだんだんと離れていきました。例えばアメリカでは、今でもセルフビルド、DIYで作ろうとする精神があり、その点が非常にうらやましいなと思います。昔は、日本人もアメリカ人のように簡単なところは自分で直したりしてはいたはずですが、そのような感覚を取り戻すには、そのための仕組みづくりをすることが大事だと思うので、プロではない普通の人でも加工できる、扱えるという状況を作っていくと良いでしょう。そうすると、例えば災害時でも自分で対応できる範囲が広がり多くの人を助けることにもつながってきます。

#### 【木の耐久性】

木は耐久性について心配されることが多いですが、作り方や保存方法により長く使うことができます。そのことも、しっかりと実験データを揃えてつまびらかにしていくことが木を扱う人の責任でもあると思います。この材料をこのように使えばこれだけ使い続けることができ、より長持ちさせるためにはこの塗装をするということをはっきりと明らかにすると良いと思います。新しく開発された塗料など、木をより長持ちさせる技術も出てきています。木をそのまま雨ざらしにすればすぐに状態が悪くなるのは当然ですが、適切にメンテナンスをして使うということがかつて日本人の文化にはあったはずですが、例えば年に1回障子を張り替えるというように、日常的にメンテナンスを行うトレーニングを日本人は行っていません。そのような慣習もだんだん忘れ去られているので、もう一度自分たちで建物のメンテナンスをする機会をつくることで日本人の文化がよみがえり、建物も長持ちしますし、自分たちの建物への思い入れもリフレッシュすると思います。建築において、メンテナンスフリーを希望される方は多いですが、本当にメンテナンスが一切不要というものはありません。メンテナンスをすること自体が自分たちの建築だけでなく文化を守っていく、育てていくことになるので、メンテナンスすることを厭わないようにしなければならないと思います。現代の人は面倒な事、単なる作業を避ける傾向がありますが、これは無駄な作業を削ぎ落していく合理化の過程で楽しさも捨ててしまったためではないのでしょうか。作ることやみんなで行うことに楽しみが内在しています。例えば屋根の葺き替えなどは楽しいお祭り感覚でできると思います。

#### 【第1回コンペティションの感想】

最優秀賞作品の蔭戸を利用した防災拠点のアイディアは、建築というのは面積が限られているという考えを変えて、蔭戸を開くことで面積を変えることができるという豊かな発想だと思いました。広げた時に内と外が曖昧になるというオープンな考え方が日本の建築らしいアイディアだと思いました。こういうアイディアはもっと他にも展開できると思います。優秀賞作品の跳び箱からベビーベッドは、私自

身幼少の頃、跳び箱がよくできた構造物だなと感心する一方で、他のことには使いいなと感じていました。それが、この作品のように他のことに使えるということで、目から鱗といった感じでした。作品全体を通して振り返ると、私も発想しないようなアイデアもあり、みんなでアイデアを出しシェアできるということの素晴らしさを感じました。

**【第2回コンペティションへのコメント】**

少しずつアイデアが成長していくと良いと思います。もちろん初めて応募される方はゼロベースでスタートするわけですから、そこから出るアイデアが素晴らしいとも言えるのですが、既に出たアイデアに別のアイデアを上乗せして発展させることで、より高度なアイデアが期待できると思います。ですので、昨年度の他の応募者の作品をご覧いただくと全体のレベルがアップするのではないかと思います。たくさんのすばらしいアイデアを楽しみにしています。